

友人つきあいは人々の健康な食生活に影響をおよぼすのか

—社会的ネットワーク・アプローチの提案—

鳥取大学 片野 洋平

1. はじめに

近年の消費者庁や食品安全委員会の誕生により、政府による食品の安全性に対する管理体制は整いつつある。しかし、消費者は、そうしたより正確な情報をうまく活用することができているのであろうか。教育歴、収入、社会階層、人付き合いなど、個人のもつ社会的な資質が異なれば、食品の安全性に対するアクセスも異なるのではないだろうか。本研究は、個人的な資質の中でも、友達つきあいが食の安全性へのアクセスと深く関わっていると考える。その際、本稿では、社会関係資本論の知見を手がかりに先行研究および少人数の大学生を対象とした質問票から得たデータ、およびインタビューデータから、探索的に、友達つきあいと食の安全性へのアクセスとの関連性の可能性を示し、研究の道筋を明らかにする。そして、社会的ネットワークによるアプローチを用いることの重要性を示す。

2. 先行する研究

1) 二つの社会関係資本論と健康

社会関係資本論には、二つの研究の方向性がある。一つ目は、社会関係資本は特定の集団や地域などの人々の間で共有されている社会的な資源と考える、社会関係資本をいわば公共財・集合財として捉えるアプローチである。二つ目は、社会関係資本は特定の個人や集団が利用することができる、ネットワークに埋め込まれた資源と考える社会ネットワーク論的なアプローチである。

たとえば、前者の例でみると、Putnamによれば、社会関係資本とは、「人々の協調行動を活発に

することによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会的仕組みの特徴」を意味する[1]。他方で、後者の例でみると、Linによれば、社会関係資本は「人々が何らかの行為を行うためにアクセスし活用する社会的ネットワークに埋め込まれた資源」[2]とすることができる。

社会関係資本を集合財とする前者の立場からみれば、ある特定の集団や地域のメンバーが共有する「信頼」「規範」「ネットワーク」などは、ある特定の集団や地域の健康を増進させたり、減退させたりする可能性があるかと仮定することになる。なぜなら、たとえば、ある特定の集団や地域には、健康を増進させるような健康被害の不確実性を低減させる一効果、があるかもしれないからである。

他方で、社会関係資本を個人が利用できるネットワークとする後者の立場からみれば、特定の個人がどんな人的なネットワークを保有するかで、健康が増進したり、減退したりする可能性があるかと仮定することになる。なぜなら、たとえば、そうした個人は、健康に関する情報を、自分の持つネットワークから得られる可能性が高かったり低かったりするからである。

こうした、社会関係資本の2つのアプローチは主観的健康度やメンタルヘルスなどの健康問題に対して適用されてきた。社会関係資本を集合財としてとらえる研究では Kawachi 等を中心とした研究チームにより成果が上がっている[3]。社会関係資本を社会的ネットワークに埋め込まれた資源と考える研究としては、たとえば、Lin 等が対人間のつながりが、メンタルヘルスへ影響を及ぼす可能性について論じている [4] [5]。

同じ健康でも、食品の安全性から健康をとらえ

る研究は、佐藤・山根および小林によって、それぞれ社会階層と食生活の関係から行われている [6] [7]。たとえば、佐藤・山根は、親の社会階層が子の食生活へ及ぼす影響について分析を行っているのに対し、小林は本人の教育、職業、収入が、本人のよりよい食生活に対してどのような影響を与えるのかを分析している。こうした、教育、職業、収入の分布とその変化から、つまりその属性から一、従属変数を説明するアプローチは、社会関係資本を公共財・集合財として扱う研究に位置づけることができよう。

2) 健康な食生活と友達つきあい

しかし、これまでのところ、国内では、個人の食生活を通じた健康が、社会的ネットワークに埋め込まれた資源としての社会関係資本から説明されたことはない。そこで、本研究では、友人つきあいに代表されるような、社会的ネットワークが、食生活にどのような影響を与えるのか、その可能性を示し、社会関係資本の研究に位置づけたい。

3. データと分析枠組み—ネットワーク概念を用いたヒューリスティックアプローチ

友人つきあいといった社会的ネットワークが、食生活に影響を与える可能性については、分からないことが多い。そこで、2011年3月鳥取大学において「食品安全論」を受講した30人程度の学生を対象とした簡単なアンケート調査、および、同講義を受講した生徒の内、さらに10名に対して一人1時間程度のインタビュー調査を行った。この調査データから、ヒューリスティック・アプローチ（試行錯誤しながら問題を明らかにする発見的技法）により、学生の友人つきあいがよりよい食生活に影響をおよぼす可能性について考察する。

なお、鳥取大学の学生は、およそ8割が県外出身であるため、調査対象者のほとんどが大学へ入学後、親元を離れ、自炊している。また自炊をする時期に食品の安全性に気づいたという調査結果の割合が大きかった。人生において食品の安全性について敏感になる時期がいくつか想像できるが、自炊を始める時期は、その重要なモメントとなり

得る。その意味でも、大学生を対象に、自炊を始めた時期において、友人のつきあいが、食品の安全性の情報源となりうるのかを明らかにすることは意義がある。

4. 考察

この簡単な調査から研究の方向性を示すことができる。先行研究が指し示すように、友人とコミュニケーションをとっているということは、食品の安全性の情報入手において、有利に働く可能性がある。食品の安全性の情報源に関する設問において、テレビ、インターネットから情報を入手する学生割合が最も多かったが、大学の友人から情報を入手する割合も次いで多かった。ここから、どんな、そして、どの程度、友人とのつきあいがあると、食品安全の情報が得られるのか、について、さらに明らかにする必要があるであろう。

参考文献

- [1] Putnam, Robert, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press, 1993.
- [2] Lin, Nan, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press, 2001.
- [3] Kawachi, Ichiro, Subramanian, S.V., and Daniel Kim, eds., *Social Capital and Health*, Springer Science, 2008.
- [4] Lin, Nan, Xiaolan, Ye, and Walter, Ensel, "Social Support and Depressed Mood: A Structure Analysis", *Journal of Health and Social Behavior*, 40, 1999, pp.344-359.
- [5] Luke, A. Douglas and Jenine K. Harris, "Network Analysis in Public Health: History, Methods, and Applications", *Annual Review of Public Health*, 28, 2007, pp.69-93.
- [6] 佐藤祐子・山根真理「食」と社会階層に関する研究：高校生に対する「食生活と家族関係」についての調査から『愛知教育大学家政教育講座研究紀要』38、2007、pp.83-98.
- [7] 小林盾「社会階層と食生活：健康への影響の分析」『理論と方法』25(1)、2010、pp.81-93.